

これから「街の使い方」を始めよう

新しいまちづくりにむかって

二〇一二年、日本全国の地方都市では、中心市街地は空洞化し、郊外化が進み、ロードサイドの風景は画一化し、郊外型の大型ショッピングセンターにはにぎわいがあるという状況が広がっている。浜松市も同様である。中心市街地活性化事業をどのように進めたいのか、日本のどの地方自治体も明確な答えは出せていない。私たち浜松まちなかにぎわい協議会とアンテナは、この中心市街地でまちづくりを試みている。私たちもまた答えを模索している中で、この夏から「RE05 肴町プロジェクト」というワークショップが始まっている。地域の人々とまちなかに関心がある学生や若者が主体となって、まちなかの課題をテーマに設定し、その準備過程でワークショップにより意見交換をし、コミュニティとまちづくりへの関心を醸成していくというプロジェクトである。このプロジェクトを浜松まちなかにぎわい協議会と進めるのは「アンテナ」という浜松に縁のある若者三人で設立されたグループで、まちづくりのための塾のような活動を昨年からは始めている組織である。にぎわい協議会もアンテナもまだ生まれて間もないが、まちづくりに対していい意味で既成概念に囚われずに協働し、共にまちづくりを模索中だ。

商業の価値、コミュニティの役割

今の日本は、どこでも小売業の売上減少に歯止めが掛かっていないのが現状で、近隣の静岡市、名古屋市のみならずあの東京の都心部でさえ売上は減少している。しかもインターネットを使った販売を含めての小売業の推移が減少しているのである。今後ますますこの傾向が続くのも明らかである。また小売業界では大量生産大

量消費を前提にした大手資本、特に郊外型の大型ショッピングセンターが自分たちの強みを発揮したお客様のニーズに合った品揃えや価格などマーケティング戦略により、いつそう拡大しつつある。大型ショッピングセンターは駐車場が無料だし、ネットは家にいながら商品を買うことができる。それらは端的に便利だ。だから便利であるという価値観はいつそそれらに任せて、中心市街地は別の価値観で作って行きましよう、ということが、私たちがここまで模索してきた意見の中で多からず持つことのできた確かな手応えである。

その時、この別の価値観を担う要素の一つが人とのつながりだ。このつながりを中心市街地においてどのように増やしていけるのが私たちの大きなテーマであり、まちづくりの根幹である。このつながりは、単なる地縁血縁のつながりというだけではなく、あるいは自治会や商店街といった既存の組織のことだけでなく、趣味やお気に入りのお店が同じ人であるとか、共通の知人がいるだとか、もう少し柔軟で緩やかな状態も私たちはイメージしている。

自分たちの手で地域資源を活用する

もう一つ、大事なテーマがある。浜松まちなかにぎわい協議会のテーマでもある「自分たちの手で自分たちのまちをつかっていく」ということだ。どんなに優れたコンサルティング会社にまちづくりを頼んだとしても、まちづくりの主体者の気持ちが入らなければ絶対に向かないだろうし、どんなに有名なイベントを招致できたとしても同様にうまくいかないだろう。重要なのは、まちづくりの主体者が自分たちの手でまちづくりを進めていくことなのである。主体者の行動をどう引き出すかが肝要で、これを補助する仕組

みをつくるのが私たちの役割とわかっていく。

今回のワークショップでは、その地区が持っている地域資源を地域の人たち自身が再認識することをテーマに、若いスタッフと住民などまちなかの参加者が意見を交換し合う。若いスタッフはワークショップの対象地域である中区肴町の歴史を調べたり、地域の皆が知っている背割道路でのイベント(十一月に開催予定)を参加者に提案していくという方法をとる。地域の参加者はそうした自分たちに関わる具体的なテーマを八回にわたる意見交換会で共に議論し、共有し、地域資源を確かめていく。この人のこころが面白いだとか、この場所はちょっとした歴史遺産だとか、自分たちの持つ資源に気づくことやそれを皆と議論し共有していくことが、まちをつくる活気につながっていくのだ。

街の担い手をつかっていく、つなげていく

これまでのアンテナの活動にはRE=Real Education(実践的教育)という名前がつけられている。RE01から数えてこの肴町プロジェクトが五回目である。REには、教科書とにらめっこするのではなく、現場で実践し、今自分たちの目の前にあるものを実感すること、まちづくりを学び、さらにはその学習自体がまちづくりにつながっていくような活動を目指すという意味が込められている。アンテナがこれまで共に学んできたのは若い人材が多い。今回も彼らのエネルギーを利用して、地域住民に何らかの火が灯されることを期待している。

また、まちなかの方の支援をいただき、今回活動拠点を対象地域の肴町に構える。こうすることで私たちの活動が地域に触れる機会を増し、関心を惹きつける

狙いである。調査やヒアリングなど、地元の人と近い距離で活動する方が気軽にコミュニケーションも生まれるだろう。また意見交換ワークショップには自治会、商店街以外にも地元の主婦層や若者まで幅広く参加を促している。これからのまちづくりは、一つの主体や一つの価値観だけで進められるのではなく、なるべく多くの価値観とつながりを生むようなものでなければならぬと考えているからである。

つながりこそ最大の地域資源

今回のRE05では背割道路という公共空間を対象として、皆に関わる公共のことについて一人一人が考える機会を設けていく。さらに今後は、個別の商店やテナント、地権者などを相手にして、個人のことを皆で考えていくことも視野に入れ活動していくつもりだ。私たちが目指す自分たちによるまちづくりは、個人が皆を考え、皆が個人を考えるという、この両方のベクトルが必要不可欠なのである。つながりはここでも重要だ。自分がどのようなつながりに身をおいているのかということを実感できれば、「個」と「みんな」はスムーズに連続するはずだからである。

このような一連の活動を通して、つながりの広さ、深さにより次第に地域全体の活動量が増えることが想定され、こうした動きは一つの新しい地域活性化、賑わいの創出と呼べる状況に育っていくのではないかと考えている。コミュニティを広げ醸成していくこと。自分たちの地域資源を使い、自分たちの手で、自分たちのまちをつくること。郊外大規模SCとは違った価値観で商業の形につなげる。今までの価値観を尊重しながら、これからの「街の使い方」を、皆で始めていくきっかけを作ることが現時点での確かな目的だ。

浜松まちなかにぎわい協議会

浜松まちなかにぎわい協議会は、2010年の設立からこれまで、夏フェスや冬フェスといった催事の運営や、店主が市民に技術や専門知識を教えるまちゼミなど、中心市街地に関わる様々な主体と共同しながら、関係性を醸成してきました。3年目を迎える今年度からは、街の主体者が自分たちで自分たちの街を作っていくという大きなテーマに基づき、具体的な自治組織と協力し、自分たちの手によるまちづくりの実践を進めていきます。RE05 肴町プロジェクトでは、中心市街地に位置する肴町自治会と肴町の商店街組織である肴町発展会の協力を得て、4ヶ月にわたって事業を展開していきます。



伊藤 規晃 いとう・のりあき

1971年 静岡県浜松市生まれ
2010年 浜松商工会議所から浜松まちなかにぎわい協議会事務局へ

由緒ある肴町が今後も変わらぬ趣のある街として、存在していくためには、その魅力磨きに自ら汗をかき続けるということしか解決策はないのではないかと感じる。今回のRE05～肴町プロジェクトでも、肴町の人たちの「思い」を「形」にして伝えられたら……と思っています。よろしくお祈りします。



吉林 和穂 よしはやし・かずほ

1958年 静岡県浜松市生まれ
2010年 浜松信用金庫から浜松まちなかにぎわい協議会事務局へ

全国でまちづくりに関わっているいろいろな人たちとお話したときに、地域に対する強い「思い」がいつも感じられます。今回のRE05～肴町プロジェクトでも、肴町の人たちの「思い」を「形」にして伝えられたら……とに向けて活動していきたいと思っています。



河合 正志 かわい・まさし

1960年 静岡県浜松市生まれ
2010年 遠州鉄道から浜松まちなかにぎわい協議会事務局へ

浜松まちなかにぎわい協議会が立ち上がった2年を経過しました。手探りで始めた活動ですが、少しずつ「やらなくてはいけないこと」の整理がついてきていると感じています。これからも「まちなか」の地域の皆さんといっしょに「新しい街」に向けて活動していきたいと思っています。

メディアプロジェクト アンテナ

アンテナは2010年に辻琢磨と吉岡優一によって静岡県浜松市に設立された、地方都市の社会問題を教育によって解決していくための実践機関です。これまで、我々は若い人材を育成する実践教育Real Education/REプロジェクトを運営してきました。参加者は、デザイン系の学生、建築関係者、社会人など多岐に渡り、リサーチやレクチャーシリーズの運営、行政への企画提案などを通じて街を自分ごとに捉える仕組みづくりを推進しています。RE05 肴町プロジェクトは、このような活動の延長にあって、且つ、より地域に開かれた活動を展開していきます。



吉岡 優一 よしおか・ゆういち

1984年 静岡県掛川市生まれ
筑波大学修了、日建設計勤務

掛川、浜松、つくば、オランダ、大阪と引越し、現在は設計事務所に勤務しています。「まち」は、学生・商店街・産業・企業・行政などすべてにある枠組みを横断する可能性を持っています。大阪から浜松のヒントになる事例を紹介させてもらおうと企んでおります。



植野 聡子 うえの・さとこ

1985年 静岡県伊東市生まれ
静岡文化芸術大学大学院修了

アンテナのプロジェクトの中で、今回は一番実践的で、かつ責任が伴うものになりました。様々な所属を越えて集まったスタッフや肴町の方々、いつもアンテナの活動に興味をもってくださっている方々を巻き込んで、みんなが自分事として明るく楽しくできるような活動にしていきたいです。



辻 琢磨 つじ・たくま

1986年 静岡県浜松市生まれ
Y-GSA 修了、403architecture[dajiba] 共同主宰

まちというのは、形があるだけでなく、おじさんもおばさん子供も犬も建物も道路もお店も商品も人情も全部ひっくるめてできています。そういう一つ一つを全部ごとと巻き込んで一緒に自分たちのまちについて考える機会を提供してきました。

肴町プロジェクトとは

浜松まちなかにぎわい協議会は、設立三年目を迎える今年度から、街の主体者である地権者や住民が自分たちで自分たちの街を作っていくという大きなテーマに基づき、具体的な自治組織と協力し、自分たちの手によるまちづくりの実践を進めていきます。

その第一弾となるRE05肴町プロジェクトでは、中心市街地に位置する肴町自治会と



肴町の商店街組織である肴町発展会の協力を得て、四ヶ月にわたって事業を展開していきます。肴町と有楽街を結ぶ細い路地（通称「背割道路」）を取り上げ、この空間の利用価値について公募スタッフとともに考え、実践していくプロジェクトです。

私達スタッフ一同は今年十一月のこの背割道路を利用した短期イベントに向けて、

八回の話し合いの場（ワークショップ）を設け、肴町の方々にスタッフの調査や提案にご意見をいただきながら、ともにイベント開催に向けて進めていきます。

チームスタッフの活動拠点は、肴町にある築四十四年の昭和の趣のあるビル「小林ビル」です。ビルオーナーの多大なるご協力のもと、空室を貸していただくことになりました。

スケジュール

ワークショップ チームスタッフ

7月

拠点整備
小林ビルの掃除
家具運び入れ

調査
各店舗の歴史について調査

8月

(1) 歴史の研究、分析
(2) 他都市の事例研究
前回のフィードバック

研修
先行事例である
大阪市中之崎町への研修

9月

(3) 提案・意見交換
(4) 前回は踏まえた提案
意見交換

提案
背割り道路を活用した
イベントの提案

10月

(5) 提案決定
レクチャー
(6) イベント準備
(7) イベント準備

イベント準備
イベント開催に
向けて準備

11月

(8) イベント開催

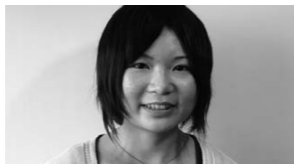
実施
11月初旬～中旬開催

私たちが RE05の 運営スタッフです



青沼 克哉 あおぬま・かつや
1989年 静岡県浜松市生まれ
早稲田大学大学院修士1年

浜松西高校を卒業し、現在は建築学を勉強しています。もともと浜松の中心市街地に対して何か建築的なアプローチはできないかと考えていた時、このプロジェクトを見つけました。この活動を実践の場とし、自らのターニングポイントと捉えてやっていきたいと思っています。



伊藤 彩良 いとう・さら
1993年 岐阜県大垣市生まれ
静岡文化芸術大学空間造形学科1年

文芸大の建築サークルでこのプロジェクトを知り、学校では学べない体験がしたいと思い参加しました。この機会に一つでも多くの事を吸収し今後に生かしたいです。また、たくさんの繋がりを一つつくりコミュニケーションの輪を広げたいと思います。



折田 千秋 おりた・ちあき
1993年 青森県十和田市生まれ
静岡文化芸術大学空間造形学科1年

大学の建築サークルの先輩に勧められ参加しました。調査、企画、話し合い、人とのコミュニケーションなど自身の成長に繋がる要因が多くあります。この機会を大切に、励んでいきたいです。



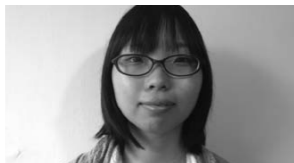
金田 梨沙 かねた・りさ
1987年 京都府京都市生まれ
パッケージ制作会社勤務

これまで京都、東京、仙台、浜松、別府、イギリス、大阪…と様々な土地で過ごしてきました。色んな土地で過ごした事で出会いは必然だと感じております。RE05への参加も縁あっての事で、様々な分野の方と出会えお話を伺える事がとても楽しみです。



栗田 佳樹 くりた・よしき
1991年 静岡県川根町生まれ
静岡大学情報学部情報社会学科3年

大学の授業でこのプロジェクトに参加しています。初対面の方々との活動は常に新鮮で、様々な事を学ばせていただいております。多くの人と関わることで、自分の見識を広げていきたいです。



塚本 麻友 つかもと・まゆ
1991年 愛知県刈谷市生まれ
静岡大学情報学部情報社会学科3年

大学の講義でこのプロジェクトを知り、活動に参加させて頂きました。学校では外部の人々と関わる機会はなかなか無いので、様々な人々と関わり合いながら自分の視野を広げ、楽しく活動していけたらと思います。



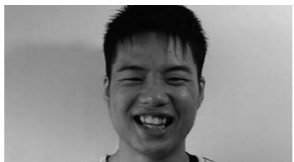
土屋 龍太郎 つちや・りゅうたろう
1985年 静岡県浜松市生まれ
浜松ホトニクス勤務

社会人として浜松市に帰ってきて、昨年のRE03から参加させていただいています。RE05の参加者や肴町の人々とコミュニケーションをとることで生まれる可能性を楽しみにしています。これから宜しくお願いします。



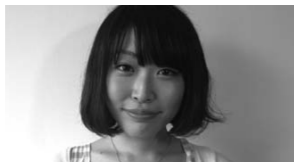
名倉 早紀 なくら・さき
1991年 静岡県浜松市生まれ
静岡大学情報学部情報社会学科4年

私は浜松市出身なので、このプロジェクトを通して自分の生まれ育ったまちをもっとより良いものにしていけたら、と思っています。また、色々な方と関わることで自分の視野を広げていきたいです。よろしくお願いします。



坂野 貴洋 ばんの・たかひろ
1992年 愛知県名古屋生まれ
静岡文化芸術大学空間造形学科2年

静岡文化芸術大学で建築を学んでおります。私はまだ、浜松に来て二年目ですが、肴町の皆さんといういろいろなお話をする中で肴町や浜松のことをもっと知り、浜松に住む人間として積極的にまちづくりに参加していきたいです。よろしくお願いします。



伏見 綾乃 ふしみ・あやの
1990年 静岡県静岡市生まれ
静岡大学情報学部情報社会学科4年

大学3年生の時から自治会の調査を行っていることもあり、その繋がりで今回のプロジェクトを知ることとなりました。大学で学んだことが、実践の場で活かしていけたらと思っています。また、大学生の自分では知り合うことのできない人と、接することとても楽しみにしています。



山下 泰弘 やました・やすひろ
1985年 静岡県浜松市生まれ
派遣会社勤務

RE03から参加させて頂いている山下泰弘です。子供の頃から遊びに来ていた街中から昔の様なにぎわいがなくなってしまったことに寂しさがあります。参加する仲間、街の人たちと協力し、活気がある街を取り戻したいです。

肴町からの声



伊東 隆司
1930年生まれ
現在 伊東商店店主、肴町発展会会長

にぎわい協議会を中心に若いスタッフと地元の人達と一緒に一つのことを考えていく取り組みということで、期待があります。背割道路の問題は自分たちも見落としていた部分でもあったので、違う視点が入ることによる新鮮な提案に期待しています。若いスタッフに関しても、好きな事に対して今の安定を求めないで取り組んでいける姿勢に関心します。今回のテーマでもあるつながり、コミュニティという部分も含めて、今後どういう発展をしていくかが楽しみです。

レポート アンテナ代表 辻琢磨

6月26日レクチャー

「つながりから地域の魅力を考える」

RE05肴町プロジェクトでは、背割道路の利活用提案という具体的な目的を掲げる一方で、「つながり」という柔らかな言葉もひとつのキーワードとして設定している。その「つながり」から地域の魅力について考えていこうという特別講義をRE05の事前説明会と合わせて、去る6月26日、肴町公会堂にて開催させて頂いた。

この講義は、RE05肴町プロジェクト特別事前講義「つながりから地域の魅力をつくる」と題し、講師には静岡大学情報学部教授の笹原恵氏、横浜、石巻で活動する建築家西田司氏をお招きし、地域コミュニティのあり方とこれからの軸に講義が進んだ。会場となった肴町公会堂には、商店街に携わる方々、学生、社会人、と80名を超える多種多様な来場者が詰めかけ、熱気を帯びた。

横浜で活躍する若手建築家の西田司氏は、震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市中心市街地活性化の取り組みを主に紹介し、従来型のリゾート型観光ではなく里帰りを体験するような観光計画や、工房を併設した拠点整備など細やかな実践を披露した。街を作る時の価値観が大きく変わろうとしている。今まで当たり前だった、商業や観光、活性化という意味合いが変化している。西田氏の活動はその変化を見事にキャッチし、実行するものだった。

一方、同じくゲストにお招きした静岡大学情報学部教授笹原恵氏のレクチャーは、震災後の新しい時代に直接コミットする西田氏とは対比的に、歴史を紐解きながら現代を考えるものだったといえる。

自身の分野である社会学は、噛み砕いて言えば人とのつながりを考える学問だそう。人と人がどのようなつながりがあってきたか、家族、友人、ジェンダー、自治組織などから研究を進めてきた。2005年の大合併

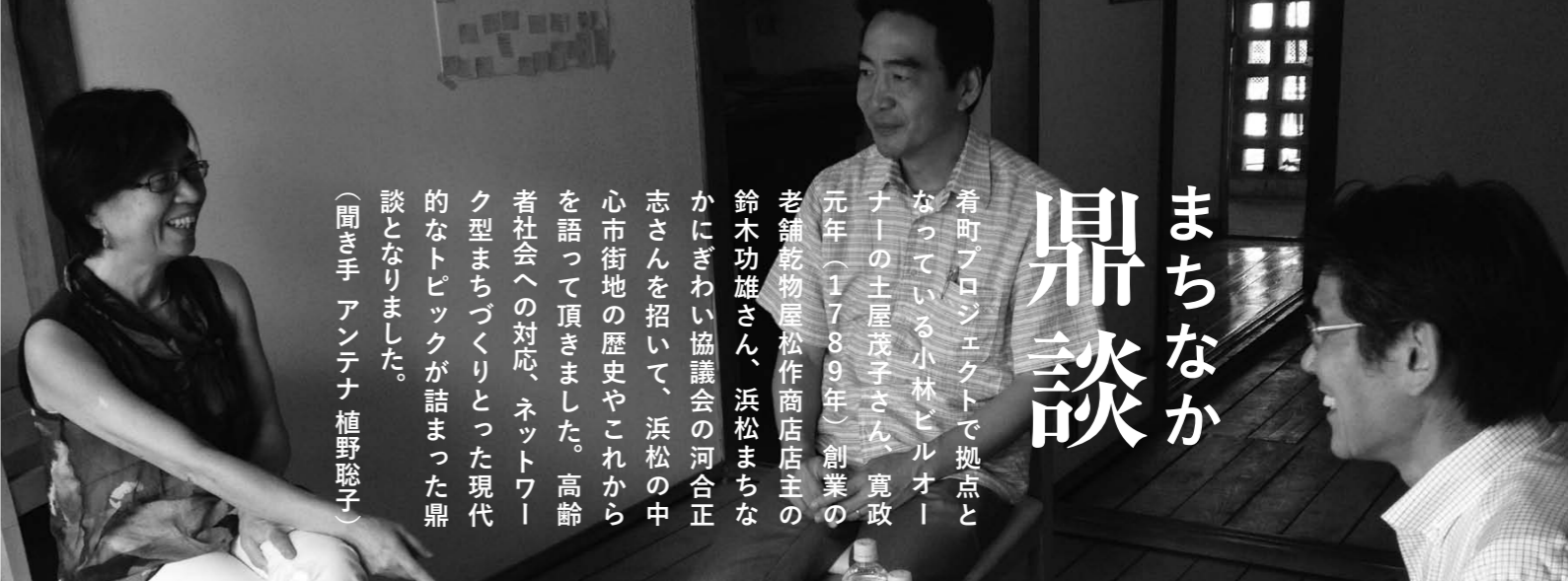
で浜松市の自治会は738に膨れ上がったという。自治会という組織もこの大合併で同一市町村内で格差が生まれ、高齢化率や世帯数比率に市街地と山間部で大きな溝があるそう。

ここで市街地に目を向けてみた時、自治体組織の構築に大きく寄与しているのが、浜松まつりであるということがこの日の笹原氏のメインテーマとなった。一年の殆どをたった3日間のための準備に費やす浜松まつりの運営母体は地域自治体である。それはつまり、祭りの組織体系が日常の自治運営にそのまま影響を及ぼしているということでもあり、笹原氏は「本番の盛り上がりは言わずもがな」この浜松まつりの日常的な側面に着目し、浜松まつりが日常生活を含んだ地域活性化に如何に貢献しているのかを説いてくれた。新しい価値観を細やかに創りだす西田氏と対照的に、笹原氏の研究は今すでにある歴史や組織の再評価し、地域資源として見出していく術を示したと言えよう。

その後の来場者を含めたディスカッションでも多様な意見が交換され、この日の講義は盛況に幕を閉じた。現状を直視し、細やかに新しい価値観を実践する西田氏の活動と、歴史に目を向けその価値を再評価する笹原氏の研究は、「つながりから地域の魅力をつくる」という今回の講義テーマから見直した時、大きなヒントを我々に与えてくれたように思う。



まちなか 鼎談



まちなかの昭和時代

植野 今日はい、ご自身のお話やご家族のお話などからまちづくりに関することまで、幅広くお話できればと思います。今日お越し頂いた土屋さん、鈴木さんともに昔のまちなかを体験されています、昔はどのような街でしたか？

鈴木 そうですね、昔は道の前に溝が流れて、船を流して遊んだり、土団子を作って遊び対決してたりと平和な時代でした。五社神社でカブトムシを取りにいったりもしましたよ。それが昭和30年代のことです。当時はまだのどかでした。交通量も多くなかったです。

鈴木 その後、新幹線ができて、新浜松駅が出来て、高架化されて、ターミナルができてどんどん変わっていきました。肴町はどうでしたか？

土屋 魚だけではなく、肴町に行けばなんでも揃う時代でした。それが40年代くらいまで。それ以降、スーパーで物を買うような時代になって、風景もお店もだんだん変わってきました。昭和30年から昭和50年でかなり時代が変化して状況も変わってきた印象がありますね。

松作商店とまちなか商売

鈴木 松作商店は寛政元年の創業以来、ずっと肴町に店を構えて主に海産物

を扱ってきました。乾物の商売に関して私が知る大きな変化といえば、かつおパックの発売は昭和47年で、その頃から社会も業態もだんだん変わっていった印象があります。



河合 そういった状況の中で「これから」の商売をどう考えていますか？

鈴木 例えばインターネット販売。最初はなかなか採算が合いませんでしたが、そんな中でショッピングカートのレンタルサーバーを見つけて、それを利用し始めたらかなり注文も増え始めました。自分のような初心者でも簡単にできるんだから、多くの人にチャンスがあると思います。ネットの売上がやはり大きいですか。大きいですね。ブログで周知したり、余り知られてない情報を載せたり、個人レベルでの観光と商売を試みています。逆に店舗ではネットでも買えないようなものを狙うという方向性に可能性を感じています、例えば仲見世で買うおみやげのようなもの。買いに来た思い出とセットで買って、友人に知らせることが購買の価値になっていくような時代ですから。

小林ビルのこと

植野 小林ビルに関して少し教えて頂けますか？

土屋 昭和41年11月に小林ビルはオープンしました。1-2階がテナント、3-5階までは住宅供給公社のアパートでした。

河合 建った当時はどのように入居者が決まったのですか。

河合 一方、今企業で頑張っている彼らが定年して個としてネットワークされる時にも何か役割を見つけた必要があるとも言えます。そこでは誰が偉いとかではなくて、得手不得手なことというところでしょね。

土屋 団塊世代のことを考えると、これから退職していく人数が単純に多いわけだから彼らが公共的な活動にうまく参加できるような枠組みが必要になっていく気がします。

河合 いろいろな人材が自分の意見を言いながら一緒に「これから」を考えていく。その人ができることで動いていくような体制を作って行きたいと思っています。今はとにかく、小さい成功事例でもいいから少しでも実現させて皆が興味を引くような状況を作っていくかという感じがします。

鈴木 今回の肴町プロジェクトでも、個人ではできない、皆が関わっていくような仕組みをにぎわい協議会が主導してくれて、肴町の皆さんが土台になって、そこにアンテナや若いスタッフが連携していつている。そういう意味でもとても期待しています。

〈登壇者プロフィール〉



鈴木 功雄 すずき・いさお
浜松市中区肴町生まれ
現在 松作商店店主



土屋 茂子 つちや・しげこ
浜松市中区肴町生まれ
現在 小林ビルオーナー

土屋 公社の部分は抽選でした。入居条件でシングルはダメでしたね。1-2階のテナントは飲食店が入っていました。ホテルの支店がテナントとして入っていましたね。ワインバーや花屋さんなんかも入っていました。いつくらいから状況が変わり始めました？

河合 昭和50年くらいからかな。住宅供給公社から買い取って、そのあとだんだん住人も変わってきました。家族で街中に住むという時代ではなくなっていました。

鈴木 当時郊外へ出ていった人が年をとってもう一度帰ってくるという現象も今はありますね。例えば東京に子供がいる場合、浜松は新幹線が止まるので交流も取りやすい。一方、中心市街地だけを見ると高齢化率が非常に高いという状況があります。

高年齢者と中心市街地

土屋 だから今後のまちづくりはお年寄りもターゲットにしたらいんじゃないかと思うんです。質のいい物を集めて、高齢者も含め世代を問わず気軽に集まれるような場所が必要だと感じますね。

鈴木 そうですね、そうやって大人のいい街にしていければ、子や孫も連れてくるので子供用の商売も成り立つわけです。

河合 市街地ではお年寄りの姿はなかなか見ないですか？

鈴木 昼間は少し見かけますが、なかなか回遊していません。

土屋 買い物一つとっても、いっぱい買ったら重くてお年寄りにとってはとても大変だし、出歩く要素は少ないです。すね。

河合 中心市街地は公共サービスの面では、病院もあるし、交通インフラも充実しています。

土屋 コミュニティスペースなんかもあるといいと思いますけど、自分一人ではなかなか難しい。

大企業モデルとネットワークモデル

河合 一人だとなかなか踏み切れないですよ。だからこそ皆で動いて実現する必要があります。例えば住民主体のまちづくりを進めるとして、大企業のように部署ごとに役割があっていると思います。個人でも、場を作っているいろんな人が関わって、自分の得意のところをやってあげばいいのではないのでしょうか。学生や若い人たちも含め、皆が意見を言えるような関係になっていけばいい。

鈴木 リーマン・ショックがあつて、大きいタンカーは沈んだけど、小舟の私たちがぶかぶか浮いてられたということを経験しました。そういう意味で、大きいことが必ずしもいい時代では

河合 昭和50年以降はどうですか？

鈴木 私が東京から帰ってきた当時（平成元年頃）は、東京の上質な価値観で売ろうと考えていました。その後にパブルがはじけて、郊外にショッピングセンターが出来て、安いものが売れなくなりました。それで結局いいものだけが残ってしまいましたね。安いものは郊外で間に合ってしまうということですね。

土屋 まちなかにこそ、いいものが欲しいという人は多いと思いますよ。需要はあるんですけど、ネットワークも価値となる時代になってきていると思います。お互いの信頼関係と頼みごとの連続によってネットワーク自体が会社のような役割を担うことができます。

河合 そのような価値観は、「つながり」や「絆」という最近特に取り上げられるキーワードにも象徴されますね。

価値観のこれから

河合 私は協議会の活動の中で、今までの前提が大きく変わっているという実感を持っています。例えば、今の若い世代はいい時を知らないんです。この前大学生に聞いたら、活性化という時、人通り、にぎわいをイメージするのではなくて、彼らは活性化自体を知らない。あるいは、僕らの世代にはサラリーマンだと社長になるのが夢でお金貯めて偉くなって、車を買って、家を買って、というイメージがあるけど、彼らは地震がいつ起こるか分からないし、会社がいつ潰れるかもわからないからそんな目的をいちいち設定してないんです。

鈴木 自営業の私も、いつ地震がきてもおかしくない状況の中だからこそ、極端に言えば、「明日死んでもいいように今日を楽しまないといけない」と日々考えますよ。

土屋 そうですね、私も今を生きなきゃいけないとよく考えます。